銀河の彼方にある惑星Ｚｉ。
其処には優れた戦闘能力を持った金属生命体――『ゾイド』が存在した。
ゾイドは自ら戦う意志を持ち、惑星Ｚｉにおける戦いの中、最強兵器として君臨していた。
時代が変わり、世の中が変わっても、それは変わらない。
ヒトとゾイドが共に在る限り――

●　●　●

荒野を走る猫が一匹――いや、それは正確には『猫』ではない。比較対象があまりに少ない、だだっ広い荒野を走っているため大きさが掴みづらいが、それは猫と呼ぶには大きすぎた。猫そのものといった、しなやかな動きだが、それは全高が五メートルはある。
ゾイドだ。
機種は〈ヘルキャット〉。かつて存在したゼネバス帝国が開発した機体で、隠密性能に優れた高速戦用ゾイドである。
ちなみに、『猫』と呼ばれているが厳密にはヒョウ型に分類される。
古い機種という事もあり、防御は言うに及ばず、出力も速度も最新鋭機に見劣りする。情報屋などの戦闘を主目的としないゾイド乗りの支持を得ていたが、限界を感じてか、近年では上位機種の〈シャドーフォックス〉に機種転換する者が多い。
長年愛され続けた名機のひとつであったが、その栄光は過去のものとなりつつあった。
だが、そんな事は荒野を走る〈ヘルキャット〉には関係がない。その挙動は軽やかで、ただ走っているだけなのに楽しくて仕方ない――そんな様子が窺えてくる。
すると不意に、〈ヘルキャット〉が減速した。進路をやや右に変え、歩くような――あくまでゾイドの感覚で言えばだが――速度で、慎重に進む。何かを探しているらしい。
やがて〈ヘルキャット〉は歩みを止めると、その場に腹這いになり、操縦室である頭部をゆっくりと地面に着けた。装甲式の風防が開き、搭乗者が荒野に降り立つ。その右手には拳銃が握られていたが、すぐに警戒の必要をなくしたらしい。すぐに懐に拳銃を仕舞うと、その場で暫し沈思黙考した。
彼が荒野の道中で見つけたのは、魔女のような帽子と外套を身に着けた少女だった。年齢は十二、三歳。小学校を卒業したかどうかだろう。
なぜ、そんな年頃の少女が一人で倒れていたのか。歩いて行けるような距離に街はない。だとすれば、搭乗していた乗り物が事故か何かに遭ったのだろうか。

耳を少女の口元まで近付け、息があるのを確認する。呼吸は穏やかで、外傷もないため、まず命の危険はないだろう。

ほっとすると、少女の容貌を確認する余裕も生まれる。多分に幼さがあるが、可愛らしい顔つきをしている。茶色の髪は肩にかかるくらいのボブカットで、彼女の快活であろう性格を感じさせる。

「……んぅ？」

どうしたものかと考えていると、少女が身動ぎし、吐息を漏らした。その際、かろうじて少女の頭に乗っていた幅広のとんがり帽子がずれ、隠れていた頭頂部が露になった。

「――ネコミミ……？」

上半身を起こして、寝惚け眼で彼を見つめる少女の頭部には、人間とは明らかに形状が異なる器官があった。正三角形に近い、柔らかそうな毛並みで覆われた、猫のそれを思わせるような耳。

それはまさしく――『ネコミミ』だった。

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL

特別篇

『別の自分 -tre arco-』

少女の名前はベアトリーチェ・ファフロウ。

彼女の立場を端的に表現するなら『旅人』だろう。

正確には『平行世界の』――と付くが。

世界は無限に存在する。『もし』という可能性の数だけ、世界は無限に分岐し、違った結果を導き出す。

ベアトリーチェが生まれたのも、そんな可能性の世界――平行世界のひとつだった。

本来、平行世界の存在は仮説でしかない。観測する術がないのだから当然だ。

しかし、ベアトリーチェの姉には平行世界を行き来する『門』を開く能力があった。紆余曲折あり、彼女等姉妹は自分達の世界から旅立った。

いくつかの世界を渡り、二人は『地球』と呼ばれる星に辿り着き、現地で知り合った少女、ツバキ・タカチホを故郷である『惑星ゼヘナ』――彼女は不慮の転移現象によって地球に来たらしい――に送り届けた。

其処で起きた新たな事件。

異邦人である自分達が、これ以上関わるべきではない――そう判ってはいたが、結局、姉妹は事態を見届ける事を選択した。

そして――

「――ネコミミ……？」

意識を取り戻したベアトリーチェが上半身を起こすと、見覚えのある男性が半信半疑といった表情で呟いた。

「……あれ？　お兄ちゃん？　わたし、『封鎖区域』に――」

少しずつ意識がはっきりしてきたのに伴い、直前までの記憶が明確になってきた。ゼヘナに〈プレケース〉と呼ばれる新たな敵性体が現れ、それが封鎖区域――〈エリアD〉と呼ばれる場所に眠る機獣を狙う可能性が浮上したため、自由に動ける立場であるベアトリーチェと姉のタオエン、それに二人の同行者と一人の密航者を加えた五人で現地に向かった。だが、ベアトリーチェとタオエン、密航者のキリエ・ソウマの三人は、目的地に到着して間もなく、突如発生した地割れに呑まれのだった。

（そうだ。わたしはタオ姉が咄嗟に開いた『門』を通って緊急避難したんだ。タオ姉は大丈夫だと思うけど、キリキリはどうしたんだろう。地上に残った二人も……）

すると――

「……『お兄ちゃん』？」

ベアトリーチェの言葉に、橘アサトは怪訝そうな表情を浮かべた。まるで、初対面の人間から急にそう呼ばれたかのようだ。

（……違う。この人、アサトじゃない）

よく見れば、男性は地球で知り合い、ゼヘナで再会した少年とは違っている。容姿も雰囲気も、似ているというレベルではありえないほど似ているが、年齢が違う。彼女の知るアサトは十八歳のはずだが、目の前の彼は二十代前半くらいに見える。『大人っぽい』というほどではないが、『少年っぽさ』がかなり薄れている印象だ。

（未来のアサト？　それとも、平行世界の……？）

ベアトリーチェは『門』を開けず、タオエンもまた、思い通りに行き先を選べる訳ではない。地球で、ツバキの故郷であるゼヘナに通じる『門』を開けたのは、偶々ゲヘナに繋がりやすい状況だったにすぎない。どんな世界に来たのかは、自分達で情報を集めるしかないのだ。

「ごめんなさい。知ってる人に似てたから、勘違いしちゃった。えへへ……」

「そうか。怪我とかはないか？」

恥ずかしそうに苦笑を浮かべるベアトリーチェに対し、アサトによく似た青年は気怠い雰囲気のまま訊ねた。これが彼の地だと知らなければ、単なる社交辞令だと思ったかもしれない。

「うん。大丈夫みたい」

ゆっくりと立ち上がり、くるりとその場で回転して見せる。魔女が羽織るような黒い外套が風を孕み、尻尾が円を描いた。打撲などの心配もなさそうだ。

「……尻尾もあるのか」

「え？」

「あー、いや……此処が何処か判るか？　なんで、こんな所に？」

言葉を濁した直後、彼はすぐに気を取り直すように質問を再開した。

ベアトリーチェは辺りを見渡す。だだっ広い荒野。青い空には白い雲と、並んで浮かぶ二つの真昼の月。

ゼヘナにとてもよく似ている。いくつかの平行世界を旅してきたが、月が二つある世界はゼヘナだけだった。という事は、ゼヘナに極めて近い平行世界の可能性が高い。

「……上手く思い出せない」

事実だとしても、ベアトリーチェの口から語られる内容は、彼にしてみれば突拍子もない話だろう。恐らく頭を打ったか、さもなくば『残念な子』だと誤解される。ならば記憶が曖昧な風を装って、彼から情報を得た方がいい。そう判断し、彼女は不安そうにそう言った。

「そうか……」

ベアトリーチェの様子に心を痛めたのか、アサトに似た青年は気の毒そうに声の調子を落とした。

「あ……」

仕方ないとはいえ、嘘をついている事に罪悪感を覚えた。

「ん？　何か思い出したか？」

「えっと……ねえ、お兄ちゃんの名前は？」

「ああ、アサトだ。アサト・タチバナ。ゾイド乗りをやってる」

やはりと言うべきか、青年の名前はアサトだった。だが、『橘アサト』ではない。加えて、ベアトリーチェの知らない単語が出てきた。

『ゾイド』ってな――ふぇっ!?」

不意に日光が遮られ、雲が差したのかと頭上を見上げると――巨大な何かと目が合った。

それは、まるでベアトリーチェの匂いを嗅ぐように鼻先――だろう多分――を近付けると、すぐにアサトに向き直った。頭部を擦り寄せるような仕草は、彼に甘えているようでもあり、ベアトリーチェに見せつけているようにも感じられた。

「――〈ベアト〉、あまり驚かすな」

巨大な何か――アサトが〈ベアト〉と呼んだそれは、四本足の獣だった。全高は五メートルほど。身体を構成しているのは有機物ではなく、明らかに機械に見える。

言わば、巨大な機械の獣。

（これがゾイド？　ゼヘナにも『機獣』っていうのがいたらしいけど……）

ゼヘナにかつて存在した機獣。その力を利用して戦うのが〈機獣少女〉だ。もし、ゾイドと機獣が同一の存在だとすれば、此処はゼヘナの過去に近い平行世界なのかもしれない。

「なんだ、どうした？」

甘えてくるゾイド――〈ベアト〉の頭部装甲を優しく撫でるアサト。その様子を見るだけで、〈ベアト〉がどれだけ彼に大事にされているか伝わってくる。

急に二人の会話に割って入ってきたのは、恐らくヤキモチだ。アサトを取られまいと牽制してるつもりかもしれない。

（なんだろう、この気持ち……）

微笑ましい反面、ベアトリーチェはなぜか、モヤモヤした気持ちになった。ヤキモチとは微妙に違う。本来は自分がいるべき位置を、他人に奪われたような……。

「ゾイドを近くで見るのは初めてか？」

「え……う、うん」

アサトの口ぶりから、ゾイドは誰にとっても身近な存在という訳ではないようだ。ベアトリーチェのように間近で見て驚く者は珍しくないのだろう。

（ゾイドが機獣と同じものなら、兵器なんだよね。武器背負ってるし）

〈ベアト〉は背中にミサイル・ポッド、左側面に二連装の小銃、右側面には長い銃身を備えた長銃を装備している。

（わたしの装備――〈トーレ・アルコ〉に似てる……）

ベアトリーチェの戦闘時の装備のひとつ〈トーレ・アルコ〉は、三つの飛び道具で戦う射・砲撃戦用に当たる。

（それに、名前も……）

〈ベアト〉。

ベアトリーチェ。

「ねえ、〈ベアト〉っていうのはこの子の名前なんだよね？」

「ああ。〈ヘルキャット〉っていう機種で、正式名称は〈ベアトリーチェ〉。〈ベアト〉は愛称だな」

「ふ～ん……」

なんでもない風を装って、ベアトリーチェは自分と同じ名前の存在を見上げた。

平行世界とはいえ、すべての時代に自分と同一の存在がいる訳ではない。また、それが同じ範疇であるとも限らない。『A』の世界では人間だが、『B』の世界では植物、『C』の世界では『A』や『B』の世界には存在しない何かになっているかもしれない。

これが平行世界が『可能性の世界』と呼ばれる所以だ。

（わたしがゾイドとして存在する世界……か）

〈ベアトリーチェ〉は間違いなく、この世界におけるベアトリーチェ・ファフロウだ。恐らくこの感覚を理解出来るのは彼女だけだろう。理屈ではないし、直感とも少し違う。

理解るのだ。

〈ベアトリーチェ〉が自分と同一の存在だと。

「そういえば、まだお前の名前、聞いてなかったな。名前くらいは憶えてるんじゃないか？」

「う～ん。教えてもいいけど、ちょっと言いにくいっていうかぁ」

『ハナコ』とかか？」

「全世界のハナコさんに謝った方がいいと思うにゃ～……」

アサトは『言いにくい』というのを、『恥ずかしい』という意味に取ったようだ。ベアトリーチェには判らなかったが、この世界では『ハナコ』は恥ずかしい名前に当たるらしい。

今時じゃないとか、そういう理由かもしれないが。

「……うん？」

不意にベアトリーチェのネコミミがぴくりと動いた。これは本能的に危機感を覚えた際の合図だ。その正体までは本人にも判らないが、『何かが起こる』という心構えにはなる。

――フシャアアアアア……。

警戒するような低い唸り声が聞こえた。

ゾイドの〈ベアトリーチェ〉も何か感じたようだ。操縦席のある頭部を地面に下げ、装甲式風防を開き、アサトに乗るように促す。

「お前も乗れ。なんかヤバそうだ」

「わたしも？」

「なんにせよ、こんな所に置いてけないだろ」

そう言うと、アサトは操縦席のすぐ後ろのスペースを確保し、ベアトリーチェは其処に収まった。複座らしく、操作卓と各種表示画面も一応ある。

（――あ、なんとなく判るかも……）

見た事のない配置だが、同じ人間が扱う装置である以上、当然の帰結というものがある。おおよそだがベアトリーチェには、これらの操作法が理解出来た。

「勝手に触るなよ？」

興味を持ったのに気付かれ、アサトにさっそく釘を刺された。

「は～い！」

「……良いお返事だ――っと、〈ベアト〉が感じたのはこれか」

複座用のモニターのひとつ――レーダーにいくつも光点が表示されている。アサトが言っているのはこれだろう。

「敵なの？」

「ああ、敵味方識別装置に応答がない。多分――バイオゾイドだ」

●
●
●

『バイオゾイド』。

何時しか、その一群はそう呼ばれるようになった。

特殊な流体金属装甲――通称『バイオ・アーマー』に身を包み、通常ゾイドとは明らかに見た目も雰囲気も異なる存在である。

小型・中型・大型に分類され、ほとんどは恐竜種の陸戦タイプだが、空戦タイプも僅(わず)かに存在が確認されている。

ちなみにバイオ・アーマーからは消滅後、酸化ビスマスに酷似した物質が微量に検出されており、『バイオ』という名は酸化ビスマスの化学式『Bi_2O_3』を強引に読んだものだ。

〈ベアトリーチェ〉のレーダーが捉(とら)えたのは、もっとも確認数が多い小型の獣脚類種・ラプトル型の〈バイオラプター〉だった。

元々、アサトはその駆除のために出てきたのだが、その道中で複座に座る少女を保護する事になったのだ。

（どうする？）

取り得る選択肢は二つ。

当初の予定通り、〈バイオラプター〉と戦闘を行う。

もしくは、少女を街に送ってから出直すか。

（……後者は無理だな）

〈バイオラプター〉の群れは、すでに此方(こちら)に向けて移動している。〈ベアトリーチェ〉の存在に気付いているのだ。最高速度で劣っている以上、どう計算しても街に着く前に追いつかれる。

ならば打って出た方が良い。

「すまん。戦闘は避(さ)けられそうにない」

「うん、いいよ」

振り返って見るが、少女の表情には恐怖も緊張も浮かんではいなかった。むしろ、どこか高揚しているようにすら感じられる。

ネコミミと尻尾(しっぽ)と魔女のような仮装(コスプレ)からして、アサトはこの少女が、本気で頭の螺子(ねじ)が飛んでしまっているのではないかという気になってきた。

（まあ、泣かれるよりはいいか）

気持ちを切り替え、戦闘モードに移行する。ゾイドコアの出力を上げ、火器管制装置(FCS)を起動、各部の状態チェックを行う――問題なし(オールクリア)。

戦闘開始だ。

●　●　●

結論から言うと――アサトには狙撃の才能がなかった。

「全然当(あ)たんないじゃん!?」

「……」

先手必勝と集束ビーム砲を使ったはいいが、ベアトリーチェの言葉通り、アサトの狙撃はまるで当たらない。避けられた訳ではない。明後日の方向とまではいかないものの、正確に敵に向かっていないのだ。

そして、三発目も外れた。

「あと何発あるの？」

「……二発だ」

かなりの威力があると思ったが、なるほど五発しか撃てないなら納得だ。それをすでに半分以上、無駄にしている。

「複座にビーム砲のコントロール回して！　わたしが撃つ！」

「素人にやらせる訳ないだろ！」

「え？　シロウトじゃないよ？」

きょとんとした表情を浮かべるベアトリーチェ。

「むしろ専門家だよ！」

「お前、なに言って――」

「いいから！　どうせ当たんないんでしょ!!」

「……ったく！　好きにしろ！」

投げやりな口調でアサトが言うと、複座用の操縦桿が起き上がり、主モニターにビーム砲のコントロールが委譲された旨を告げるメッセージが表示された。

「30㎜カートリッジ式高圧縮集束ビーム砲――〈デーア・フレッチェ〉」

ベアトリーチェはその名前を知っていた。

〈エグゼキューター〉である彼女の、『一つ目の弓』から撃ち出される『女神の矢』と同じ名前。

「やっぱり、そうなんだね……」

〈ベアトリーチェ〉は――無論、ゾイドの方だ――この世界における自分なのだ。

「おい！　撃つなら早く撃て！」

「言われなくっても！」

状況から必要な諸元を入力。すでに撃った三発分のデータで照準を補正。あとは自分のタイミングで――発射。

「マジか……」

「えへへ♪」

ベアトリーチェが撃った高圧縮集束ビーム砲――〈デーア・フレッチェ〉は、一撃で〈バ

イオラプター〉三機を撃破し、二機を行動不能にした。実を言えば、行動不能になった二機へのダメージは想定外だった。まさか掠めた程度で、腕や脚を切り飛ばすほどの威力とは思わなかったのだ。

続けて第二射――これも直撃。群れが散開したため二機しか撃破出来なかったが、群れの足並みを更に乱す事に成功したなら良しとしよう。なお、これで〈デーア・フレッチェ〉は撃ち止めだ。

「すごいな」

「もう少し減らしたいな。ねえ、ミサイル使っていい？」

「いいぞ。ただ、出来れば一発にしてくれ」

「どうして？」

もうベアトリーチェをシロウト扱いする気はないらしい。だが、なぜミサイルはあまり使ってほしくないのだろうか。

「ミサイルは高いんだよ」

多分に世知辛い理由だった。

「ちなみに、俺のオススメは多弾頭ミサイルだ」

オススメの理由はすぐに知れた。ポッドには三基のミサイルが装填されているが、三基とも弾頭の種類が違っており、多弾頭ミサイルが一番安いのだ。

（こんな仕様まで、わたしと一緒なんだね……）

内心で苦笑しつつ、新たに掌握したミサイルを発射。

『三つ目の弓』から放たれる『天罰の矢』――地対地ミサイル・ポッド〈ネーメズィ・フレッチェ〉。

それは高度百メートル程まで上昇すると百八十度方向転換、地上に降下しつつ弾頭部分の装甲が弾け、内蔵した無数の小型ミサイルが顔を見せ――それぞれ入力された標的に向けて発射された。

その光景はまさにミサイルの雨霰だ。

「こんなところかなぁ」

「いや……充分すぎるだろ」

十五機近くいた〈バイオラプター〉の群れだったが、すでに動けるのは半数以下となっていた。はたして満足に戦えるのが何機残っているか。

体格は通常の小型ゾイド――それこそ〈ヘルキャット〉と大差ない。それでも単純な戦闘力だけなら〈バイオラプター〉が上なのだろうが、真にも恐れるべきは『群れ』であるという事だろう。群れである事を活かした数の暴力こそ、〈バイオラプター〉の本当の脅威

に違いない。

逆に言えば、群れでなくなった時点で〈バイオラプター〉は最大の武器を失った事になる。

また、小型である〈バイオラプター〉の装甲は高くない。構造（フレーム）が剥（む）き出しの部分も多く、つまり耐久度は通常ゾイドとさほど変わらないのだろう。

「あとは各個撃破でいいよね。〈フェーデ・フレッチェ〉、準備出来（でき）てるよ」

『信仰の矢』を撃ち出す『二つ目の弓』――対ゾイド30㎜2連装ビーム・カービン。威力や射程、連射性においてもっとも汎用性が高い射撃武器だ。それもまた、ベアトリーチェは身をもって知っている。

「余計なお世話だった？」

「……いや。ついでに照準補正までやってくれると助かる」

正面を向いたまま、アサトは少しだけ不貞腐（ふてくさ）れたような口調で言った。年下の女の子に助けてもらう事に、抵抗を感じているのかもしれない。

「うん！　お安いご用だよ！」

からかうような事は言わず、ベアトリーチェは楽し気に答えた。アサトのそういう部分を可愛いと感じたし、純粋に頼られたのが嬉しかったのだ。

「……。そんじゃ、手早く済ませるぞ」

「りょうかーい！」

ゾイドの〈ベアトリーチェ〉が駆け出す。応じるように残りの〈バイオラプター〉も動き出す。撤退するという選択肢はないらしい。

「あれって無人機なんだよね？」

「多分な」

「よく判ってないの？」

「そういう事だ……！」

二連装カービン〈フェーデ・フレッチェ〉の銃口が火を噴く。間隔を空けて放たれた二発の光線は、一機の〈バイオラプター〉の胸元と胴体に着弾。その場に頽（くずお）れ、灰色の装甲は蒸発するように消えていく。僅（わず）かに残された構造（フレーム）は骨を思わせ、ベアトリーチェは少しゾッとした。

「死ぬとあんな風（ふう）になるから、研究が進まないらしい。生け捕（ど）りは難しいしな」

アサトの『死ぬ』という言葉に違和感を覚えなかった。ベアトリーチェが無人機だと感じたのは、〈バイオラプター〉の動きに搭乗者の存在――意志が介在しているように思えなかったためだ。それに、ただの自動操縦（オート・パイロット）だったとしても、バイオゾイドも通常ゾイド

と同じ金属生命体のはずだから。

「そうなんだ……」

仲間がやられても〈バイオラプター〉は怯んだ様子がない。尾を高く上げ、二本の脚で大地を駆け、威嚇するように突き出た顎を上下に開き、咆哮を上げながら向かってくる。その様子は知性を持たない獣そのもの。生物であれば本能的に知っているはずの、恐怖すら持ち合わせていないように感じられる。

一機、また一機と、〈バイオラプター〉を仕留めていく。やはり、群れでこそ威力を発揮するのだろう、単機での脅威度はそこまで高くない。

やがて戦場に動くものは〈ベアトリーチェ〉の他になくなり、荒野にはバイオゾイドの骨だけが散乱していた。

●
●
●

「お兄ちゃん、どうして射撃苦手なのに、この装備を使ってるの？」

戦闘を終えた帰り際、ベアトリーチェはふと気になって訊ねてみた。アサトの操縦自体は問題ない。むしろ、恐らく上手い部類だろう。ならば、もっと彼に向いている装備があるはずだ。

「……直球だな」

「回りくどいの苦手なんだもん」

ほんの少しだけ考えるような間があって、まあいいかといった様子でアサトは答えた。

「〈ベアト〉は形見なんだよ、装備込みでな。だから、出来ればそのまま使いたいんだ」

「……」

思いのほか、シリアスな理由で少し戸惑う。本人は特に気にしていない様子なので、訊いてはいけない事ではなかったようだが。

「……じゃあ、これからもこの装備は換えないの？」

余計なお世話だと自覚しつつ、それでも問いかけを続ける。

「そのつもりだ」

「でも、もうわたしは手伝ってあげられないよ？」

「……まあ、なんとかなるだろ」

明らかに間があった。射撃が不得意なアサトに、この装備が合っていない事は自覚しているのだろう。

不意に沈黙が横たわる。互いに無言で、〈ベアトリーチェ〉の走る駆動音だけが聞こえる。

「――わたしが手伝って、本当に迷惑じゃなかった？」

「……え？」

「余計な事を、とか。お節介、とか。思わなかった……？」

先ほどは強引に手を貸したが、アサトにも矜持（プライド）があるはずだ。自分よりも武器の扱いが上手いベアトリーチェを、内心では快く（こころよ）思っていない可能性もある。

「まあ、そう思う奴もいるかもな」

気怠（けだる）い口調でアサトは続ける。

「けど、俺の場合はありがたい。手伝ってくれるなら万々歳（ばんばんざい）だ」

「……」

「俺のプライドなんて、横から見た紙切れ一枚分もない。なんなら猫の手だって遠慮なく借りるぞ？」

冗談めかしたアサトの言葉に、ベアトリーチェは思わず噴き出した。

（だってさ。大丈夫だよ、アサトはあなたを嫌ったりしないよ）

先の戦闘の際、ベアトリーチェは照準補正に割り込みをかけている存在に気付いていた。まるで『自分の方がすごいんだ』と張り合うように。そんな事が出来るのは〈ベアトリーチェ〉――もう一人の自分しかいない。ゾイドなら普通に出来る事なのかは判らないが、〈ベアトリーチェ〉もまた、ベアトリーチェと同じく火器の扱いを得意としている。なのに、普段はそれをしないのであれば、理由はひとつしか考えられない。

余計な事をしてアサトに嫌われたくないのだ。

平行世界における同一の存在だが、此方（こちら）側の自分はベアトリーチェよりも臆病な性格らしい。

「あっはは！　ふ～ん、そっかそっか」

「なんだよ？」

「なんでもな～い！」

次の戦闘で、アサトは驚くだろう。

だが、きっとそれだけだ。

（大丈夫。だって――あなたは愛されてるんだから）

●
●
●

「……っち」

ゾイド乗りというのは仕事柄（がら）、他人から恨みを買いやすい。だが、初対面の相手に舌打

ちをされたのは、アサトにとって初めての経験だった。
「なあ、お前の地元では、舌打ちは握手みたいなもんなのか？」
「違うよ。タオ姉はちょこっとだけ男の人に厳しいから」
最寄りという事もあり、アサトはとりあえず自分の住む街に少女を運んだ。其処で身元確認をするなり、警察に届けるなりするつもりだったのだが、街に到着してすぐに彼女の姉から呼び止められたのだ。
「――失礼。妹と再会出来た喜びと、その妹が見知らぬ男性と並んでいる事への嫌悪で、思わず取り乱してしまいました」
淡々と告げる少女の姉。
見た目は高校生くらい。緩く波打つ銀色のセミロング。神秘的な金色の瞳。とても綺麗な少女なのだが、無表情で、妹と違い愛想がまるでない。
ただ、外見的な類似点こそないが、魔女のような黒いとんがり帽子と外套は共通している。なにより、互いに姉妹と認めているなら問題はないだろう。
それよりも気になるのは――
「気にしなくていい。ただ、もし今の態度を悪いと思ってるなら、お姉さんのそのモフモフの尻尾を――」
「寝言は寝てから言ってはどうですか」
ゴミを見る目で言われた。まあ、初対面の相手に尻尾を触らせろというのは、初対面の相手に舌打ちするのと同等かそれ以上に失礼というか非常識だろう。だが、言い訳をするなら、それくらい彼女の尻尾はモフモフだったのだ。
「そうですねすみません」
「……お兄ちゃん？」
妹の方からも残念なものを見る目を向けられてしまった。特定の人種にとってはご褒美かもしれないが。
「それはそれとしてだ――良かったな、お姉さんと会えて。家族の事を覚えてるなら、記憶もすぐに回復するだろ」
「――え？　……あー、うん。タオ姉と会って、もう色々と思い出したかも」
「……記憶喪失だったんだよな？」
「うん！」
「俺の目を見ろ」
「お兄ちゃんがイケメンすぎて、恥ずかしくて見れないよぅ」
少女はあからさまに目を逸らし、あからさまな言い訳をした。どうやら、記憶喪失とい

うのは嘘だったらしい。なら、あんな荒野で倒れていた理由は……。

「はあ……。まあ、別にどうでもいい」

アサトが何か不利益を被った訳ではないし、説明出来ない理由があって、やむを得ず嘘をついたのかもしれない。ならば追及しても仕方あるまい。

「……怒ってないの？」

「ああ」

「そっかあ……えへへ、ありがとう」

珍しく不安そうな表情から一変、少女は見慣れた明るい表情に戻った。

「そろそろ行きますよ」

「あ、ちょっと待って！」

姉に呼ばれた少女がアサトに向き直ると、ちょいちょいと手招きをした。『しゃがめ』という意味だと理解し、腰を落とすと――

「――――」

左の頬に柔らかな感触を覚えた。

それがキスだと気付いた頃には、少女はもう姉の隣にいた。

「……っ!?」

ちなみに、此方を見つめる姉は無表情のままだが、アサトにはそれが鬼の形相にしか見えなかった。

「――じゃあね！」

満面の笑みを浮かべ、別れの言葉を告げる少女。すると、思いのほかあっさりと、少女は姉と共にアサトに背を向けた。ほんのさっき会ったばかりの他人だ、そんなものだろう。

（そういえば、結局、名前訊かなかったな――）

ネコミミと尻尾を付けた茶色の髪の少女。姉の方は狐のような尻尾だったが、帽子の下にも、やはりキツネミミがあったのだろうか。

姉妹の去った方向を見つめ、アサトはふと、そんなどうでもいい事を思った。

●
●
●

「タオ姉、此処ってやっぱり……」

「ええ。ゼヘナに極めて近い世界でしょうね」

「じゃあ、あのゾイドっていうのが機獣なのかな？」

「呼び方が違うのであれば、まったく異なる存在の可能性もあります。それより――」

タオエンが歩みを止め、ベアトリーチェと正面から向き合う。
「私はこれ以上、あの世界の出来事に関わるべきではないと思います」
惑星ゼヘナ。
此処に来る前にいた世界。
「この世界に姉さんの気配はありませんし、このまま別の世界に――」
「戻ろう？」
「……私の話を聞いていましたか？」
「タオ姉が正しいかもしれないけど、わたし、またお兄ちゃんに逢いたい。やみ子ちゃんやツバキちゃんに会いたいよ」
「……」
「ね？」
「……はあ」
嘆息するタオエン。それは最愛の妹に向けたものか、それに抗えない自分へのものなのか。
「すぐに――という訳にはいきませんよ？」
「うん！　タオ姉、大好き！」
「――出来る限り急ぎましょう」
「わーい！」

これは、此処じゃない何処か、今じゃない何時かの出来事。

END

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとお）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』特別篇をお届け致します。

今年の三月にサイトに掲載させていただいたenigma9641さん作の『ベアトリーチェ トーレ・アルコ』、その付属バトストがようやく形となりました。

ゾイドとしての〈ベアトリーチェ〉は今後、ちゃんと書く予定があるため、どう読み切りとして書くか迷った結果、『ゾイやみ』のベアトリーチェと絡めるという変化球になりました。

ちなみにですが、本作の世界は過去作である『狂襲姫』シリーズとは別の世界です。劇中に登場したバイオゾイドも、『ジェネシス』や『ジェネレイションズ』と設定が違います（装甲の名前も『ヘルアーマー』でなく『バイオ・アーマー』）。

なので、『ヘルキャット一機でバイオラプター十五機とか、テラワロス。草生（は）える。ダメよ、ダメダメ』とか言うのは勘弁な！

よきところで謝辞を。

まずは〈ベアトリーチェ〉を立体化、しかも今回はご自身が考案したオリジナル装備まで作ってくださったenigma9641さんに感謝を。ゾイドと擬人化、二人のベアトの共演は、両方を愛してくださってるenigma9641さんが嬉しいのはどんな内容かと考えた結果でもあります。個人的にも満足いく話になり、本当に感謝です。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。『ゾイやみ』も八月から再開予定なので、また、やみ子達にお付き合いください。

２０１８／７／10　流遠亜沙

アンケートに答える
『Gallery of enigma9641』ページに戻る
『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX 第2部』小説ページに戻る